

見落とされる緑内障

病気に関連する予防医学と豆知識

6月30日の産経新聞に掲載された記事をお伝えいたします。40歳以上の20人に1人発症し、中途失明の原因新患で最多の緑内障。早期発見できれば点眼薬で視野欠損を防止できるが、自覚症状がないため眼底検査が重要だ。ところが人間ドックの2割は、眼底写真の診断を眼科以外の医師が行っており、見落とされる危険が高いことが患者団体の調査でわかった。

調査したのは患者団体の緑内障フレンド・ネットワーク。昨年10月に無作為抽出した人間ドック425施設から回答を得た。98.3%は基本検査項目に眼底検査を入れているが、明確に「緑内障検出のため」としているのは、このうち47.1%だけ。同9.6%は、診断のための眼底写真を片方しか撮影していない。さらに19.0%は1次検診の眼底写真を、眼科以外の医師が判定していた。

眼科医が両目の眼底写真を判定する施設は、緑内障の疑いの検出率が4.3%だが、眼科以外の医師が片方だけの写真で判定した場合は0.5%に急落する。同ネットワーク代表顧問で赤坂北沢眼科院長の北沢克明さん(71)は「現行の人間ドック検査指針による検査状況では、緑内障が見落とされる危険がある」と警鐘を鳴らす。同会は、代表を務める柿沢映子さん(69)=柿沢弘治元外相夫人=が、患者同士の支え合いや緑内障予防を目的として平成12年に設立し、会員は1600人余り。映子さんは東京の大学病院を受診していたが、適切な治療が行われず末期症状に。北沢さんを訪ねて手術を受け、進行は止まったが視野の9割を失った。眼球は、瞳孔前後のすき間を房水(ぼうすい)と呼ぶ体液が満たし、球としての張りを調節している。房水が生産過剰や排出不良になると眼球内の圧力(眼圧)が高くなり過ぎ、眼球後端から脳につながる視神経を押しつぶしてしまう。これが緑内障の原因の一つ。また、視神経が先天的に弱く、通常の眼圧でもつぶれてしまう正常眼圧緑内障は、40歳以上の発症者の7割を占める。

視神経は光を感じる網膜から伸びる120万本の神経線維(せんい)の束で、つぶれた部分の視野は欠け、二度と修復できない。厚生労働省によると、平成14年度に身体障害者手帳を交付された視覚障害者の原因疾患は、緑内障が25%と最多。半面、自覚症状が弱いため、発症者の8割は治療を受けていないという調査資料もある。

自覚症状が出現したときには、かなり進行していると考えるべきであり、そうなる前に、眼科専門医による診察を受けることが望まれる疾患ですね。



医療法人 照燈会

あかね台 眼科脳神経外科クリニック

Akanedai Clinic of Ophthalmology and Neurosurgery